3　豆　類・そ　ば

(1) 要　旨

平成17年産の豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が22万5,000ｔで前年産に比べて６万1,800t（38%）増加し、らっかせいが２万1,400ｔで前年産並みであった。一方で、小豆は７万8,900ｔ、いんげんは２万5,700ｔで、前年産に比べてそれぞれ１万1,600t（13%）、1,600t（６%）減少した。

また、大豆の田畑別の収穫量は、田作大豆が17万9,300ｔ、畑作大豆が４万5,800ｔで、前年産に比べてそれぞれ５万3,200t（42%）、8,700ｔ（23%）増加した。

なお、主産県における平成17年産そばの収穫量は３万1,200ｔで、前年産に比べて１万800ｔ（53%）増加した。（表３－１）

表３－１　平成17年産豆類（乾燥子実）及びそばの収穫量（全国）

区　分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較 作付面積 対差	作付面積 対比	10ａ当たり収量 対比	収穫量 対差	収穫量 対比	(参考) 10ａ当たり平均収量 対比
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%
大　豆	134 000	168	225 000	△2 800	98	141	61 800	138	99
小　豆	38 300	206	78 900	△4 300	90	97	△11 600	87	114
いんげん	11 200	229	25 700	△ 600	95	99	△ 1 600	94	121
らっかせい	8 990	238	21 400	△ 120	99	102	100	100	103
そ　ば	44 700	…	…	1 200	103	…	…	…	…
うち、主産県	42 600	73	31 200	1 300	103	149	10 800	153	106

注：1　（参考）10ａ当たり平均収量対比とは、10ａ当たり平均収量（過去７か年のうち、最高、最低を除いた５か年の平均値）と当年産の10ａ当たり収量との対比である（以下の各統計表において同じ）。
　　2　小豆、いんげん及び落花生の収穫量調査は主産県を対象に実施しているため、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合計したものである。
　　なお、そばの収穫量調査は、主産県の結果を積み上げた主産県値として集計し、全国値は推計していない（以下の各統計表において同じ）。

(2) 解　説

ア　大豆（乾燥子実）

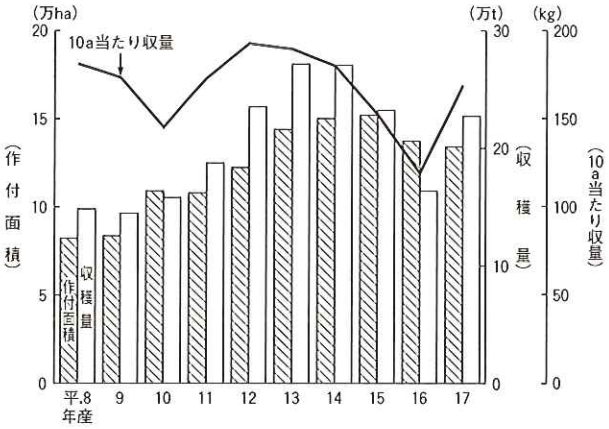
(ア) 作付面積

平成17年産大豆の作付面積は13万4,000haで、前年産に比べて2,800ha（２%）減少した。

これは、北海道において近年の不作の影響等による価格の上昇、国産大豆の需要増加等により小豆、いんげん等から転換され増加したものの、都府県において他作物等へ転換されたためである。

（表３－２、図３－１）

図３－１　大豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は168kgで、作柄が極めて悪かった前年産を49kg（41%）上回った。

これは、北陸、九州地域を中心に台風等の被害が発生したものの、全国的にはおおむね天候に恵まれ、相次ぐ台風等の影響により作柄が悪かった前年産に比べ、生育が順調で被害の発生が少なかったためである。

なお、10ａ当たり平均収量対比は99%となった。

(ｳ) 収穫量

平成17年産大豆の収穫量は22万5,000ｔで、前年産に比べて６万1,800ｔ（38%）増加した。

これは、作付面積が減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を大幅に上回ったためである。

表３－２　平成17年産豆類（乾燥子実）及びそばの収穫量（全国農業地域別）

全国・農業地域	大豆				小豆				いんげん			
	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	(参考) 10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	(参考) 10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	(参考) 10ａ当たり平均収量対比
	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%
全国	**1 340**	**168**	**2 250**	**99**	**383**	**206**	**789**	**114**	**112**	**229**	**257**	**121**
北海道	211	248	524	110	282	247	696	118	100	246	246	122
都府県	1 130	153	1 726	96	101	…	…	…	12	…	…	…
東北	343	148	509	96	34	…	…	…	2	…	…	…
北陸	149	139	207	90	6	…	…	…	1	…	…	…
関東・東山	160	166	266	92	20	…	…	…	7	…	…	…
東海	98	156	153	120	3	…	…	…	0	…	…	…
近畿	74	156	115	110	13	…	…	…	0	…	…	…
中国	68	122	82	94	14	…	…	…	1	…	…	…
四国	12	130	16	101	3	…	…	…	0	…	…	…
九州	226	167	378	91	9	…	…	…	0	…	…	…
沖縄	0	x	x	–	–	–	–	–	0	…	…	…

全国・農業地域	らっかせい				そば			
	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	(参考) 10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	(参考) 10ａ当たり平均収量対比
	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%
全国	**90**	**238**	**214**	**103**	**447 (426)**	**(73)**	**(312)**	**(106)**
北海道	–	–	–	–	168	93	156	103
都府県	90	…	…	…	279	…	…	…
東北	0	…	…	…	119	45	54	105
北陸	1	…	…	…	39	…	…	…
関東・東山	81	…	…	…	75	…	…	…
東海	3	…	…	…	4	…	…	…
近畿	0	…	…	…	6	…	…	…
中国	0	…	…	…	13	…	…	…
四国	0	…	…	…	3	…	…	…
九州	5	…	…	…	21	…	…	…
沖縄	0	…	…	…	–	–	–	–

注：（　）内の数値は収穫量調査の調査対象県の合計値（主産県計）である。

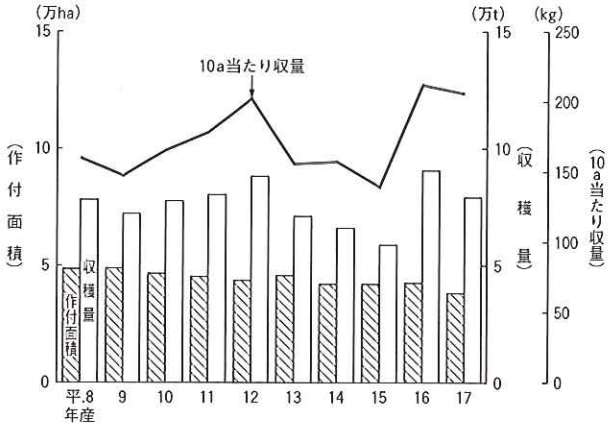
イ　小豆（乾燥子実）

(ｱ) 作付面積

平成17年産小豆の作付面積は３万8,300haで、前年産に比べて4,300ha（10%）減少した。

これは、全国の約７割を占める北海道において、作柄が安定している小麦や収益性の高い大豆等へ転換されたこと等によるものである。（表３－２、図３－２）

図３－２　小豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は206kgで、作柄の良かった前年産を６kg（３%）下回った。

これは、主産地の北海道において、８月以降干ばつ気味で推移したことから、登熟がやや抑制されたためである。

なお、10ａ当たり平均収量対比では114%となり、作柄は良好であった。

(ｳ) 収穫量

収穫量は７万8,900ｔで、前年産に比べて１万1,600ｔ（13%）減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10ａ当たり収量も前年産を下回ったためである。

ウ　いんげん（乾燥子実）

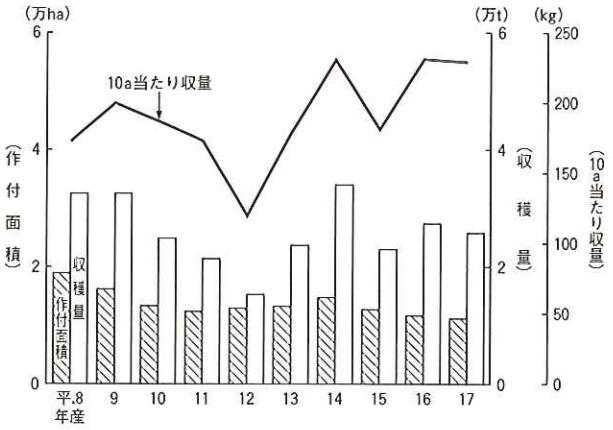
(ｱ) 作付面積

平成17年産いんげんの作付面積は１万1,200haで、前年産に比べて600ha（５%）減少した。

これは、全国の約９割を占める北海道において、作柄が安定している小麦、収益性の高い大豆等へ転換されたこと等によるものである。

（表３－２、図３－３）

図３－３　いんげんの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は229kgで、作柄の良かった前年産を２kg（１%）下回った。

なお、主産地の北海道は、登熟がやや抑制された地域があったものの、前年産並みの作柄となった。

また、10ａ当たり平均収量対比は121%となり、作柄は良好であった。

(ｳ) 収穫量

収穫量は２万5,700ｔで、前年産に比べて1,600ｔ（６%）減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10ａ当たり収量も前年産を下回ったためである。

エ　らっかせい（乾燥子実）

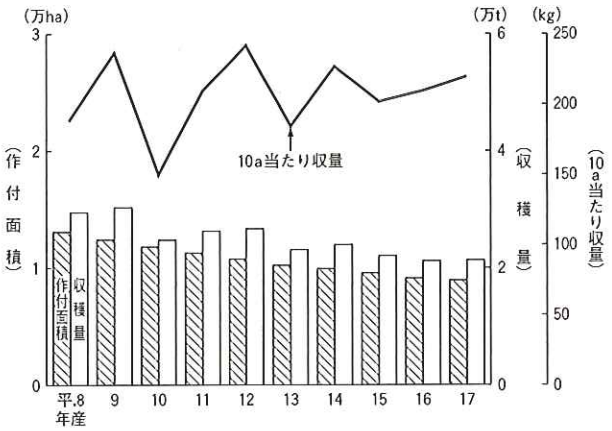
(ｱ) 作付面積

平成17年産らっかせいの作付面積は8,990haで、前年産に比べて120ha（１％）減少した。

これは、全国の約７割を占める千葉県において、生産者の労働力事情等により減少したこと等によるものである。

（表３－２、図３－４）

図３－４　らっかせいの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は238kgで、前年産を４kg（２％）上回った。

これは、生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

なお、10ａ当たり平均収量対比は103％となった。

(ｳ) 収穫量

収穫量は２万1,400ｔで、前年並みとなった。

オ　そば

(ｱ) 作付面積（全国）

平成17年産そばの作付面積は４万4,700haで、前年産に比べて1,200ha（３％）増加した。

これは、都府県において他作物への転換等により減少したものの、北海道において生産振興が図られたこと等により増加したためである。

このうち、主産県（計）の作付面積は４万2,600haで、前年産に比べて1,300ha（３％）増加した。

（表３－２）

(ｲ) 10ａ当たり収量（主産県）

主産県における10ａ当たり収量は73kgで、作柄の悪かった前年産を24kg（49％）上回った。

これは、相次ぐ台風等の影響により作柄の悪かった前年産に比べ、生育期間を通じておおむね天候に恵まれたためである。

(ｳ) 収穫量（主産県）

主産県における収穫量は３万1,200ｔで、前年産に比べて１万800ｔ（53％）増加した。

これは、作付面積が増加したことに加え、10ａ当たり収量も前年産を上回ったためである。

4　かんしょ

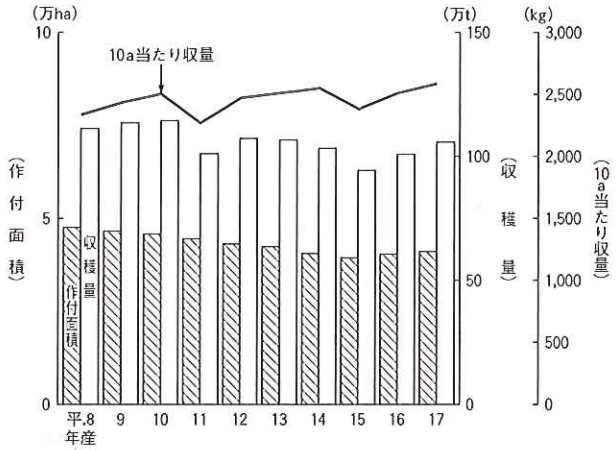
(1) 作付面積

平成17年産かんしょの作付面積は４万800haで、前年産に比べて500ha（１％）増加した。

これは、生食用の作付けが中心である関東・東山において、前年産の価格が低下したこと等による減少があったものの、九州において醸造用の需要が多いこと等から増加したためである。

（表４、図４）

図４　かんしょの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移



(2) 10ａ当たり収量

かんしょの10ａ当たり収量は2,580kgで、前年産を80kg（３％）上回った。

これは、初期生育はやや抑制されたものの、６月以降天候に恵まれたことから生育が回復し、着いも数が確保されたためである。

(3) 収穫量

収穫量は105万3,000ｔで、前年産に比べて４万4,000ｔ（４％）増加した。

これは、作付面積が増加したことに加え、10ａ当たり収量も前年産を上回ったためである。

表４　平成17年産かんしょの収穫量（全国・主産県）

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較 作付面積 対差	作付面積 対比	10ａ当たり収量 対比	収穫量 対差	収穫量 対比	(参考) 10ａ当たり平均収量 対比
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%
全国	40 800	2 580	1 053 000	500	101	103	44 000	104	103
主産県計	32 800	2 770	909 500	500	102	103	41 700	105	103
うち、茨城	6 830	2 660	181 700	△270	96	98	△11 400	94	104
千葉	5 400	2 570	138 800	△ 30	99	106	7 400	106	105
静岡	1 000	2 070	20 700	△ 60	94	100	△ 1 300	94	100
愛知	630	1 760	11 100	△ 38	94	98	△ 900	93	99
徳島	1 240	2 390	29 600	△ 10	99	102	200	101	104
長崎	584	1 930	11 300	△ 60	91	97	△ 1 600	88	95
熊本	1 250	2 340	29 300	△ 20	98	99	△ 700	98	100
宮崎	2 430	2 820	68 500	170	108	108	9 500	116	108
鹿児島	13 500	3 100	418 500	900	107	103	40 500	111	102

注：かんしょの収穫量調査は主産県を対象に実施しているため、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合計したものである。

5　飼料作物

(1) 要　旨

平成17年産牧草の収穫量は2,968万2,000ｔで、前年産に比べて104万1,000ｔ（３％）減少した。

このうち、いね科のみの収穫量は1,066万8,000ｔ、まめ科といね科のまぜまきは1,882万1,000ｔで、前年産に比べてそれぞれ15万3,000ｔ（１％）、85万5,000ｔ（４％）減少した。

青刈りとうもろこしの収穫量は464万ｔで、前年産並みであった。

ソルゴーの収穫量は127万5,000ｔで、前年産に比べて８万1,000ｔ（７％）増加した。

主産県における青刈りえん麦の収穫量は22万1,000ｔで、前年産に比べて9,600ｔ（４％）減少した。（表５）

表５　平成17年産飼料作物の収穫量（全国）

区分	作付（栽培）面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較 作付（栽培）面積 対差	作付（栽培）面積 対比	10ａ当たり収量 対比	収穫量 対差	収穫量 対比	（参考）10ａ当たり平均収量 対比
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%
牧草	782 400	…	29 682 000	△5 900	99	…	△1 041 000	97	…
うち、いね科のみ	258 200	4 130	10 668 000	1 900	101	98	△ 153 000	99	99
まめ科といね科のまぜまき	518 900	3 630	18 821 000	△7 400	99	97	△ 855 000	96	100
青刈りとうもろこし	85 300	5 440	4 640 000	△2 100	98	102	△ 19 000	100	103
ソルゴー	20 100	6 340	1 275 000	△ 700	97	110	81 000	107	100
青刈りえん麦	7 400	…	…	△ 300	96	…	…	…	…
うち、主産県	5 880	3 760	221 000	△ 310	95	101	△ 9 600	96	102

注：飼料作物の収穫量調査は主産県を対象に調査を実施しており、牧草、青刈りとうもろこし及びソルゴーの全国値は主産県調査結果と主産県以外の推計値を合計したものである。また、青刈りえん麦の収穫量調査は、主産県の結果を積み上げた主産県値として集計し、全国値は推計していない。

(2) 解　説

ア　牧草

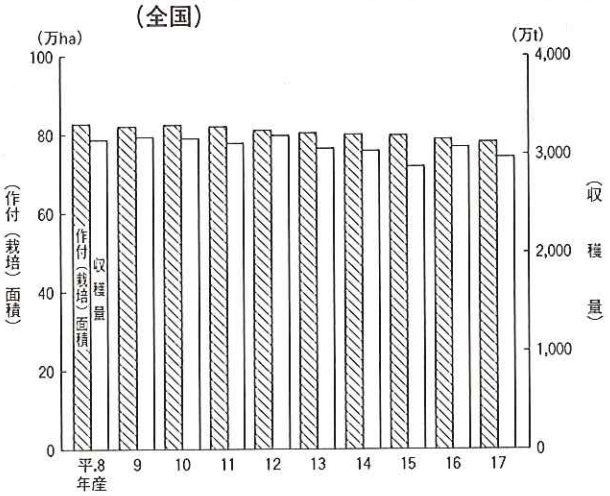
(ｱ) 作付面積

平成17年産牧草の作付（栽培）面積は78万2,400haで、前年産に比べて5,900ha（１％）減少した。

これを、栽培形態別にみると、いね科のみの作付けは25万8,200haで前年産に比べて1,900ha（１％）増加したものの、まめ科といね科のまぜまきは51万8,900haで前年産に比べて7,400ha（１％）減少した。

（表５、図５－１）

図５－１　牧草の作付（栽培）面積及び収穫量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量はいね科のみが4,130kg、まめ科といね科のまぜまきが3,630kgで、それぞれ前年産を90kg（２％）、110kg（３％）下回った。

これは、北海道で、融雪の遅れや４月から５月の低温により生育が抑制されたことや、都府県で、は種期の降雨や２月から３月及び５月の低温の影響等による生育の遅延があったためである。

(ｳ) 収穫量

収穫量は2,968万2,000ｔで、前年産に比べて104万1,000ｔ（３％）減少した。

このうち、いね科のみの収穫量は1,066万8,000ｔ、まめ科といね科のまぜまきが1,882万1,000ｔで、前年産に比べてそれぞれ15万3,000t（１％）、85万5,000ｔ（４％）減少した。

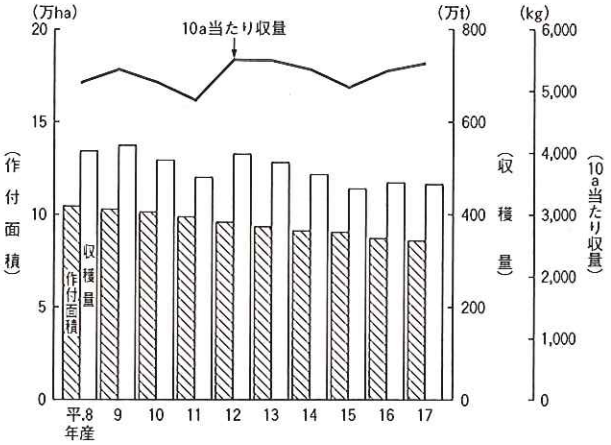
イ　青刈りとうもろこし

(ｱ) 作付面積

平成17年産青刈りとうもろこしの作付面積は８万5,300haで、前年産に比べて2,100ha（２％）減少した。

これは、畜産飼養戸数・頭数の減少、他作物への転換等により減少したためである。（表５、図５－２）

図５－２　青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は5,440kgで、九州地域等で台風の被害があった前年産を110kg（２％）上回った。

これは、北海道では作柄の良かった前年産を下回ったものの、全国的に生育期間を通しておおむね天候に恵まれたためである。

(ｳ) 収穫量

収穫量は464万ｔで、作付面積は減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったことから、前年産並みとなった。

ウ　ソルゴー

(ｱ) 作付面積

平成17年産ソルゴーの作付面積は２万100haで、前年産に比べて700ha（３％）減少した。

これは、畜産飼養戸数・頭数の減少、他作物への転換等により減少したためである。

（表５、図５－３）

(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は6,340kgで、九州地域等で台風の被害があった前年産を600kg（10%）上回った。

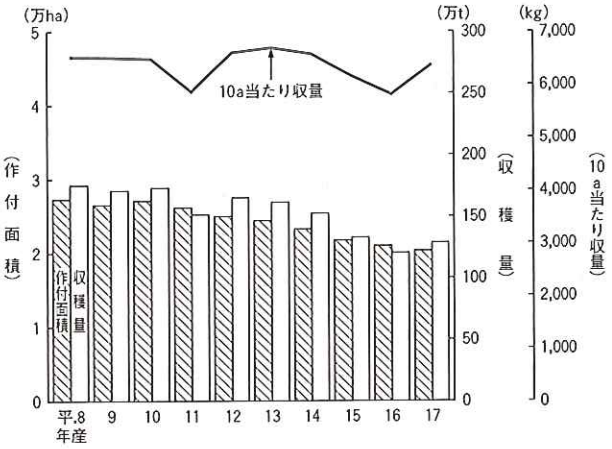
これは、生育期間を通しておおむね天候に恵まれたためである。

(ｳ) 収穫量

収穫量は127万5,000ｔで、前年産に比べて８万1,000ｔ（７％）増加した。

これは、作付面積は前年産に比べて減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。

図５－３　ソルゴーの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（主産県）



エ　青刈りえん麦

(ｱ) 作付面積（全国）

平成17年産青刈りえん麦の作付面積は7,400haで、前年産に比べて300ha（４％）減少した。

これは、不作付けや他作物への転換等により減少したためである。

このうち、主産県(計)の作付面積は5,880haで、前年産に比べて310ha(５％)減少した。(表５)

(ｲ) 10ａ当たり収量（主産県）

主産県における10ａ当たり収量は3,760kgで、生育期間を通しておおむね天候に恵まれたため、前年産を30kg（１％）上回った。

(ｳ) 収穫量（主産県）

主産県における収穫量は22万1,000ｔで、前年産に比べて9,600ｔ（４％）減少した。

これは、10ａ当たり収量は前年産を上回ったものの、作付面積が前年産に比べて減少したためである。

6　工芸農作物

(1) 要　旨

ア　茶

主産県における平成17年産茶の摘採延べ面積は９万6,200haで、前年産に比べて2,200ha（２％）減少した。

また、生葉収穫量は45万1,200ｔ、荒茶生産量は９万7,800ｔで、前年産に比べてそれぞれ2,800ｔ（１％）、600ｔ（１％）減少した。（表６－２）

イ　てんさい

平成17年産てんさいの作付面積は６万7,500haで、前年産に比べて500ha（１％）減少した。

収穫量は420万1,000ｔで、前年産に比べて45万5,000ｔ（10％）減少した。（表６－４）

ウ　さとうきび

平成17年産さとうきびの収穫面積は２万1,300haで、前年産に比べて1,900ha（８％）減少した。

収穫量は121万4,000ｔで、前年産に比べて２万7,000ｔ（２％）増加した。（表６－５）

エ　こんにゃくいも

主産県（栃木・群馬）における平成17年産こんにゃくいもの栽培面積は4,160ha、収穫面積は2,380haで、前年産に比べてそれぞれ100ha（２％）、20ha（１％）減少した。

主産県における収穫量は６万7,000tで、前年産並みとなった。（表６－６）

オ　い

主産県（福岡・熊本）における平成17年産「い」の作付面積は1,700haで、前年産に比べて100ha（６％）減少した。

主産県における収穫量は２万1,800ｔで、前年産に比べて1,100ｔ（５％）増加した。（表６－７）

(2) 解　説

ア　茶

(ｱ) 栽培面積（全国）

平成17年茶の栽培面積は４万8,700haで、前年に比べて400ha（１％）減少した。

これは、緑茶飲料としての需要の高まりから宮崎県等で規模拡大が図られ増加しているものの、その他の地域で傾斜地等の栽培条件不利地を中心に廃園が進んだためである。（表６－１）

表６－１　茶の栽培面積

単位：ha

区　分	栽　培　面　積	
		専用茶園
平.17年産	48 700	47 200
16	49 100	47 600
前年産対比（%）	99	99

(ｲ) 摘採延べ面積（主産県）

主産県における平成17年産茶の摘採延べ面積は９万6,200haで、前年産に比べて2,200ha（２％）減少した。（表６－２）

(ｳ) 生葉収穫量（主産県）

主産県における生葉収穫量は45万1,200ｔで、前年産に比べて2,800t（１％）減少した。

これは、一番茶はおおむね天候に恵まれ前年産を上回ったものの、二番茶以降は市場価格の低迷等による摘採面積の減少に加えて、主に九州地域で少雨により芽の伸長が抑制されたためである。（表６－２）

(ｴ) 荒茶生産量（主産県）

主産県における荒茶生産量は９万7,800ｔで、前年産に比べて600ｔ（１％）減少した。

また、茶種別にみると、普通せん茶は６万8,700ｔ（荒茶生産量の70％）、番茶は１万7,900ｔ（同18％）で、前年産に比べてそれぞれ400ｔ（１％）、900ｔ（５％）減少した。

なお、全国の荒茶生産量は10万ｔで、前年産に比べて700ｔ（１％）減少した。

（表６－２、６－３、図６－１）

図６－１　荒茶生産量（主産県）

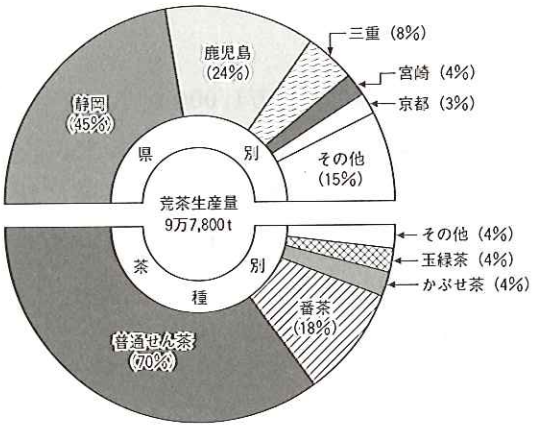


表６－２　摘採面積、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区　分	摘採面積（ha）		10ａ当たり生葉収量（kg）			生葉収穫量（t）			荒茶生産量（t）		
	実面積	延べ面積		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶
平.17年産	41 500	96 200	1 090	482	485	451 200	199 600	143 000	97 800	41 800	30 000
16	41 600	98 400	1 090	452	492	454 000	187 700	149 100	98 400	39 400	31 300
前年産対比（%）	100	98	100	107	99	99	106	96	99	106	96

表６－３　茶種別荒茶生産量（主産県）

単位：t

区　分	計	玉露	かぶせ茶	てん茶	普通せん茶	玉緑茶	番茶	その他
平.17年産	97 800	223	3 950	1 600	68 700	3 580	17 900	1 810
16	98 400	213	3 720	1 490	69 100	3 820	18 800	1 360
前年産対比（%）	99	105	106	107	99	94	95	133

イ　てんさい

(ｱ) 作付面積

平成17年産のてんさいの作付面積は６万7,500haで、前年産に比べて500ha（１％）減少した。これは、他作物への転換があったためである。（表６－４、図６－２）

(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は6,220kgで、前年産を630kg（９％）下回った。

これは、８月以降の高温等の影響により、作柄の良かった前年産に比べ根部の肥大が進まなかったためである。

なお、10ａ当たり平均収量対比では106％となり、作柄は良好であった。（表６－４）

(ｳ) 収穫量

収穫量は420万1,000ｔで、前年産に比べて45万5,000ｔ（10％）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加え、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。（表６－４、図６－２）

図６－２　てんさいの作付面積及び収穫量の推移

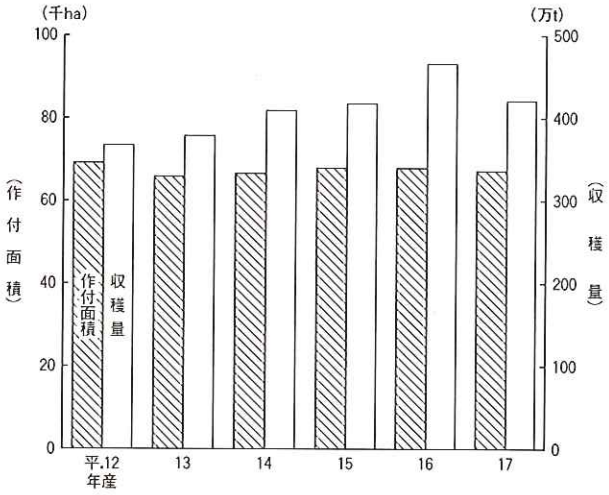


表６－４　てんさいの作付面積及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較 作付面積 対差	前年産との比較 作付面積 対比	前年産との比較 10ａ当たり収量 対比	前年産との比較 収穫量 対差	前年産との比較 収穫量 対比	(参考) 10ａ当たり平均収量 対比
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%
北海道	67 500	6 220	4 201 000	△500	99	91	△455 000	90	106

注：(参考) の10ａ当たり平均収量対比とは、10ａ当たり平均収量（過去７か年の実績値のうち、最高、最低を除いた５か年の平均値）と当年産の10ａ当たり収量との対比である。

ウ　さとうきび

(ｱ) 収穫面積

平成17年産さとうきびの収穫面積は２万1,300haで、前年産に比べて1,900ha（８％）減少した。

これは、鹿児島県において、３年連続の不作による作付けの減少や、焼酎用の需要が多いかんしょ等への転換があったことに加え、沖縄県において、前年の台風の影響に伴う不萌芽による「株出」の減少や、少雨等による生育不良から収穫放棄があったためである。（表６－５、図６－３）

表６－５　さとうきびの作型別栽培・収穫面積、収穫量及び10ａ当たり収量

区分	栽培面積 (ha)	収穫面積 (ha) 計	夏植	春植	株出	10ａ当たり収量 (kg) 計	夏植	春植	株出
全国 平.17	31 100	21 300	8 130	3 250	9 860	5 700	6 690	4 820	5 210
平.16	32 600	23 200	8 270	3 830	11 100	5 120	6 090	4 240	4 690
前年産との比較（%）	95	92	98	85	89	111	110	114	111
鹿児島	11 500	8 750	2 070	1 770	4 910	6 100	6 940	5 710	5 890
前年産との比較（%）	95	92	96	86	92	115	105	119	119
沖縄	19 700	12 500	6 060	1 480	4 950	5 450	6 600	3 760	4 540
前年産との比較（%）	96	92	99	84	86	109	112	105	102

区分	収穫量 (t) 計	夏植	春植	株出
全国 平.17	1 214 000	543 800	156 700	513 900
平.16	1 187 000	504 000	162 500	520 500
前年産との比較（%）	102	108	96	99
鹿児島	533 700	143 600	101 000	289 200
前年産との比較（%）	105	101	102	109
沖縄	680 700	400 200	55 700	224 700
前年産との比較（%）	100	111	88	88

(ｲ) 10ａ当たり収量

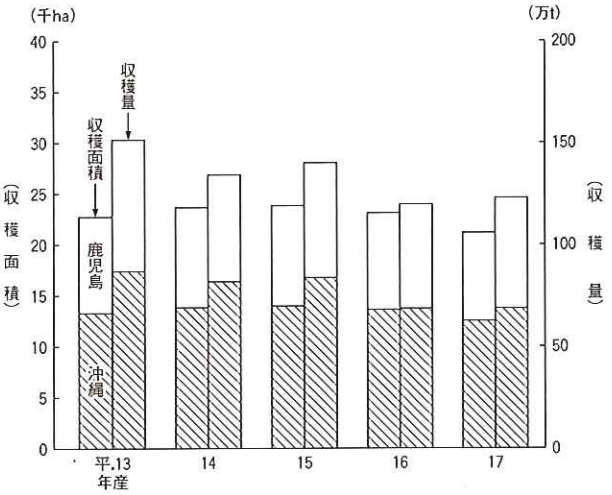
10ａ当たり収量は5,700kgで、相次ぐ台風の影響により作柄の悪かった前年産を580kg（11%）上回った。

これは、主に沖縄県で７月から10月の少雨等により生育不良となったものの、前年産に比べて台風による被害が少なかったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は92%となった。

（表６－５）

図６－３　さとうきびの収穫面積及び収穫量の推移



(ｳ) 収穫量

収穫量は121万4,000ｔで、前年産に比べて２万7,000ｔ（２％）増加した。

これは、収穫面積は減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。

（表６－５、図６－３）

エ　こんにゃくいも（主産県）

(ア) 栽培面積・収穫面積

主産県における平成17年産こんにゃくいもの栽培面積は4,160ha、収穫面積は2,380haで、前年産に比べてそれぞれ100ha（２％）、20ha（１％）減少した。（表６－６、図６－４）

表６－６　こんにゃくいもの栽培・収穫面積及び収穫量（主産県）

区　分	栽培面積	収穫面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較				(参考) 10ａ当たり平均収量対比
					栽培面積	収穫面積	10ａ当たり収量	収穫量	
	ha	ha	kg	t	%	%	%	%	%
主産県計	4 160	2 380	2 820	67 000	98	99	101	100	111
栃木	238	137	2 640	3 620	95	96	100	96	110
群馬	3 930	2 240	2 830	63 400	98	99	101	100	111

注：(参考) の10ａ当たり平均収量対比とは、10ａ当たり平均収量（過去７か年の実績値のうち、最高、最低を除いた５か年の平均値）と当年産の10ａ当たり収量との対比である。

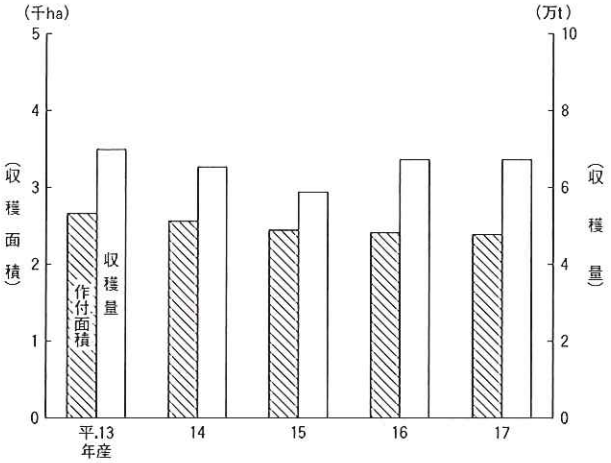
(イ) 10ａ当たり収量

主産県における10ａ当たり収量は2,820kgで、前年産を20kg（１％）上回った。

これは、群馬県の北部地域で腐敗病等の発生がみられたものの、おおむね天候に恵まれ、生育が順調であったためである。

なお、主産県の10ａ当たり平均収量対比は111％であった。（表６－６）

図６－４　こんにゃくいもの収穫面積及び収穫量の推移（主産県）



(ウ) 収穫量

主産県における収穫量は６万7,000ｔで、前年産並みとなった。

（表６－６、図６－４）

オ　い（主産県）

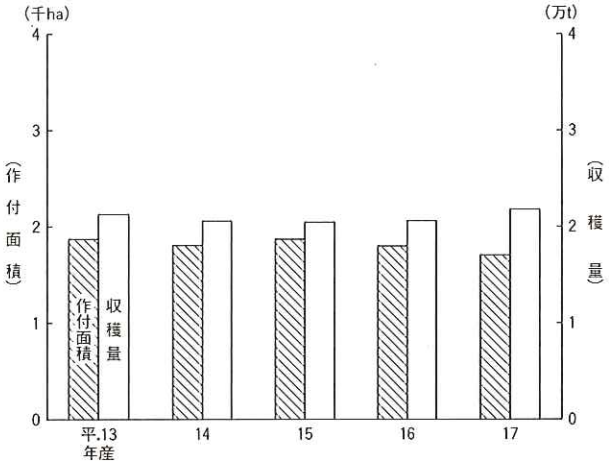
(ｱ) 作付面積

主産県における平成17年産「い」の作付面積は1,700haで、前年産に比べて100ha（６％）減少した。

これは、高齢農家を中心とした作付中止や規模の縮小があったためである。

（表６－７、図６－５）

図６－５　「い」の作付面積及び収穫量の推移（主産県）



(ｲ) 10ａ当たり収量

主産県における10ａ当たり収量は1,280kgで、前年産を130kg（11％）上回った。

これは、生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、茎数が多く、茎の伸長も良好であったためである。

なお、主産県の10ａ当たり平均収量対比は117％であった。（表６－７）

(ｳ) 収穫量

主産県における収穫量は２万1,800ｔで、前年産に比べて1,100ｔ（５％）増加した。

これは、作付面積は減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。

（表６－７、図６－５）

(ｴ) 畳表生産農家数及び畳表生産量

主産県における「い」生産農家数は1,170戸で、前年産に比べて90戸減少した。このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は1,110戸で、前年産に比べて70戸減少した。

なお、畳表生産農家の平成16年７月から17年６月までの畳表生産量は782万枚で、前年同期に比べて２万枚増加した。（表６－７）

表６－７　「い」の作付面積及び収穫量（主産県）

区分	い生産農家数	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較 作付面積 対差	作付面積 対比	10ａ当たり収量 対比	収穫量 対差	収穫量 対比	(参考) 10ａ当たり平均収量対比	畳表生産農家数	畳表生産量
	戸	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	戸	千枚
主産県計	1 170	1 700	1 280	21 800	△100	94	111	1 100	105	117	1 110	7 820
福　岡	69	65	1 370	893	△ 12	84	121	21	102	122	68	414
熊　本	1 110	1 630	1 280	20 900	△ 90	95	111	1 100	106	116	1 040	7 410